

〔展示報告〕

## システム共同運用記念シンポジウム「早慶図書館の挑戦」 併設展示に寄せて

畹田 修

はじめに

本稿は、二〇二〇年二月二十五日から三月三日まで早稲田大学総合学術情報センター二階展示室で開催された「システム共同運用記念シンポジウム「早慶図書館の挑戦」」の併設展示についてまとめたものである。

本展の企画は、二〇二〇年二月二十五日に右記シンポジウムが開催されるにあたり、それに関連した早慶共同の催しとして実現したものである。両校ともに長い歴史を持つなかで、両大学所蔵の貴重な資料を一堂に出陳した展示は珍しい機会であろう。

さて、本展の概要であるが、図書館も含めた両校の歴史や創設者の関係などをあらためてひも解くなかで、「創設者」、「大学」、「初代館長」、「図書館」というテーマに沿って資料を選び展示した。なかでも、初代両図書館長の交流が明らかになるなど、新たな発見もあった。以下、いくつかの展示資料を紹介しながら解説していきたい。

【写真①】 展示会場の風景



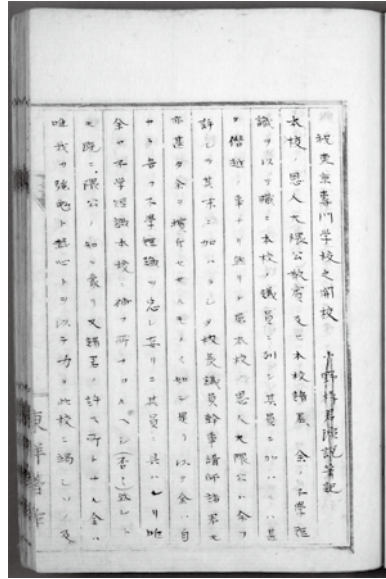
## 一 両校の歴史と創設者

前半のコーナー（創設者、「大学」）では、両校の創設者または大学の歴史にスポットをあて、関連資料を展示した。大隈重信、福澤諭吉ともに日本の近代史上欠くことのできない人物であるが、前者は政治家、後者は思想家として、異なる立場から近代日本の建設に携わったといえる。しかし、その交流関係については強い結びつきがあったことはご存じの方も多いと思う。後にも述べるが、大隈が大藏卿であった時に、福澤にその門下生のなかから有能な人物の推薦を依頼することなどもあった。

まずは両校の理念に関する資料からみていこう。「慶應義塾之目的」【写真②】は、一八九六年に福澤諭吉が同窓会で行った演説の一節を福澤自身があらためて揮毫したものである。慶應義塾に学んだ者のあるべき姿を示した「気品の泉源 智徳の模範」は、現在のモットーの一つとされている。それに対応する早稲田側の資料は、「早稲田大学教旨」【写真③】や「祝東京専門学校之開校」【写真④】である。前者は、「学問の独立」「学問の活用」「模範国民の造就」を基礎とする早稲田大学における教育の理念である。一九一三年の



【写真④】 祝東京専門学校之開校（小野梓筆、一八八二年、  
「東洋遺稿」のうち、早大蔵）

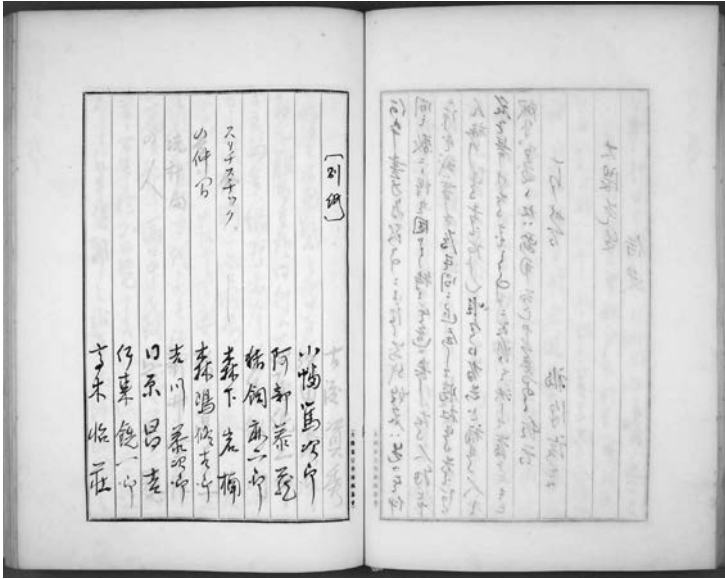


の必要性を主張した。

先述した大隈と福澤の交流に関する資料も見てみよう。市島謙吉編「大隈家収蔵文書」のなかに見られる資料は、冒頭でも触れた人材交流のひとつを物語るものである。ここには、福澤が大隈の望みに応じ統計学に詳しい人材を推薦したことが分かる書簡の写しが収められている。別紙として「スタチスチックの仲間」とあるのがその人材リストである。【写真⑤】。リストに名前が見える森下岩楠は、大蔵省に出仕するが、明治一四年の政変で下野し立憲改進党に参加、その後はジャーナリズムの道を行っていった人物である。その他では、財政危機に陥っていた慶應義塾を立て直すため、当時大蔵卿であった大隈に意見を求めた福澤の書簡がある。福澤は、文部省との折衝に際し大蔵省側

創立三〇周年の式典において大隈重信が宣言した。こうして制定された教旨は、前島密が揮毫し樺の板額に刻まれて掲げられたが、本資料はその自筆原本である。また、「立憲帝国の忠良なる臣民として」の一四文字は、戦後に教旨検討委員会の議を経て削除され、今日に至っている。後者は、「教旨」にも謳われている「学問の独立」の原点を示すものである。一八八二年一〇月二日の東京専門学校（早稲田大学の前身）開校式での小野梓の祝辞で、本学の建学の理念となる「学問の独立」を宣言した歴史的な内容である。小野はその理念の実現のために、それまで主とされてきた外国の言語・テキストではなく、日本語による教育

【写真⑤】 福沢諭吉書簡 大隈重信宛「別紙」の部分（市島謙吉編「大隈家収蔵文書」一九三四年 早大蔵）



からの意見や後押しなどを求め、大隈もそれを支援したが、結局政府からの援助については実を結ばなかった。これとあわせて、福澤が実際に文部省に提出した私塾維持資金借用願も展示した【写真⑥】。ちなみに、一八八二年に開校した東京専門学校も、開校直後は運営に苦心する道を歩むことになる。当時の私学の経営は想像以上に困難を極める状況にあった。

このような形で、大隈重信と福沢諭吉の交流は終生にわたり続けられた。自邸に温室を作り、帝国愛蘭協会の初代会長も務めるなど園芸を愛した大隈は、福澤の逝去に際し、手塩にかけて育てた花をその御霊に手向けたと言われている【写真⑦】。

その他、両者の著作や旧蔵書なども展示した。福澤については『文明論之概略』初版、『西洋事情』初版など、大隈については『国民読本』、『経世論』、『東西文明之調和』などがあげられるが、特に福澤自身の書き入れがある *Utilitarianism by John Stuart Mill* (J・S・ミル『功利主義』) は貴重であろう。ミルの『功利主義』は福澤が最も影響を

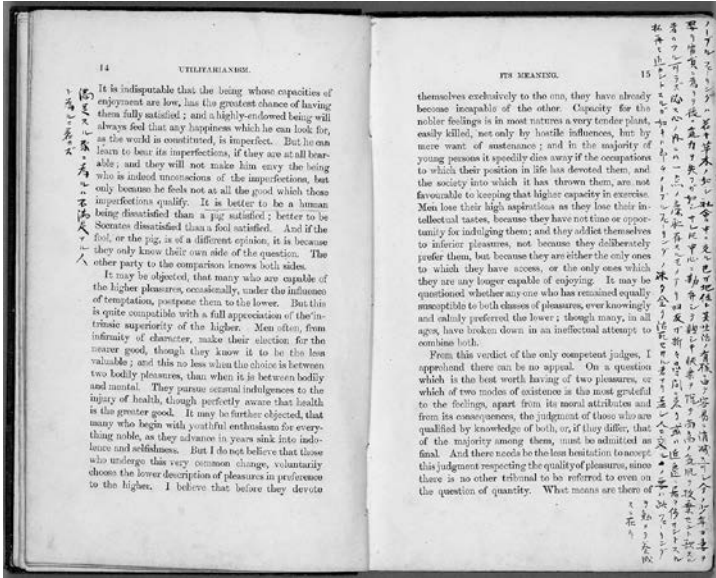
【写真⑥】 私塾維持資金借用願 西郷従道宛（福澤諭吉、一八七八年、早大蔵）



【写真⑦】 伯爵大隈家写真帳より温室の風景（一九二二年、早大蔵）



【写真⑧】 Utilitarianism by John Stuart Mill (J・S・ミル著)  
「功利主義」一八七四年、慶大蔵



システム共同運用記念シンポジウム「早慶図書館の挑戦」併設展示に寄せて

受けた洋書のひとつと言われている。福澤の旧蔵本である本書は、いたるところに鉛筆や毛筆による書き込みが見られ、その量は旧蔵書中で群を抜くものである。書入れによると、ミルの主張する正・不正の時勢に伴う変遷や、利に貪欲であり能動的で活発な精神の養成などに深い共感を持っていたことがうかがえる【写真⑧】。

二 両校図書館の歴史と初代館長

続いて後半のコーナー（「初代館長」、「図書館」）を見ていくが、その前に両校の図書館の歴史と初代館長について、ここで簡単にまとめておきたい。

慶應義塾大学の図書館の歴史は、福澤諭吉が開いた蘭学塾のゾーフ室から三田の「月波楼」図書室に萌芽を見出すことができる。図書館設立への福澤の関心は高く、大学部発足の1890年、大学部書館と称する図書館を設置した。書館は1905年に図書館と名を改め、慶應義塾創立150年記念事業として1912年に煉瓦造りの慶應義塾図書館（現在の図書館旧館）が建設された。その後、日吉、信濃町、

【写真⑨】 田中一貞肖像（慶大蔵）



矢上、湘南藤沢、芝共立の各キャンパスに図書館（メディアセンター）を設置し、現在に至っている。

初代館長は、田中一貞（二八七二～一九二二）である【写真⑨】。田中は慶應義塾を卒業後、イエール大学で社会学を学び、さらにフランスでは社会学の泰斗G・B・タルドについて学んだ。帰国後は、社会学を担当する慶應義塾最初の教授に就任した。

また、研究・教育に従事するかたわら、義塾の運営にも深く関わり、一九一〇年から一九二二年まで幹事として塾長を補佐し、初代の図書館主任、監督（館長）を一九〇五年から一九二一年に亡くなるまで務め、図書館の基礎を築いた。著書に『万延元年遣米使節図録』、『世界道中かばんの塵』などがあり、翻訳書にジョン・ブラッキー『修養論』がある。

一方、早稲田大学図書館の歴史は、東京専門学校が創立される一八八二年にはじまる。一九〇二年、東京専門学校が早稲田大学と名称を変更し、大学として組織の整備がすすめられるなかで、早稲田大学図書館は初めて独立した施設を持つことになる。その後、一九二五年に新たな図書館棟が完成した（現在の二号館）。さらに一九九一年には中央図書館が開館し、中央館の機能をここに移転して、現在に至っている。

独立した図書館組織としての初代館長は、市島謙吉（春城、一八六〇～一九四四）である【写真⑩】。市島は、小野梓との出会いにより大隈重信の知遇を得て、立憲改進黨の設立に参加し、本学の経営にも手腕を振るった。高田早苗、坪内逍遙、天野為之とともに早稲田四尊の一人に数えられる。またジャーナリストとして『高田新聞』を立ち上げ、



【写真⑩】市島謙吉肖像（早大蔵）



政治家として衆議院議員を三期務めている。

その間、東京専門学校学監であった高田早苗の薦めで、東京専門学校図書館長に就任し、改組とともに早稲田大学初代図書館長となる。一九一七年に早稲田騒動で辞するまで、一五年の長きにわたって図書館長を務め、蔵書の拡充などに奔走した。他方、日本文庫協会（日本図書館協会）を設立するなど、図書館界の発展にも寄与した。同協会主催の図書館事項講習会は、司書制度の嚆矢となった。また、『随筆頼山陽』や『随筆早稲田』などの著書のほかに、「双魚堂日誌」や「春城雜纂」など自身の日誌や筆録類は貴重な歴史資料となっている。

### 三 初代両館長の交流と草創期の図書館

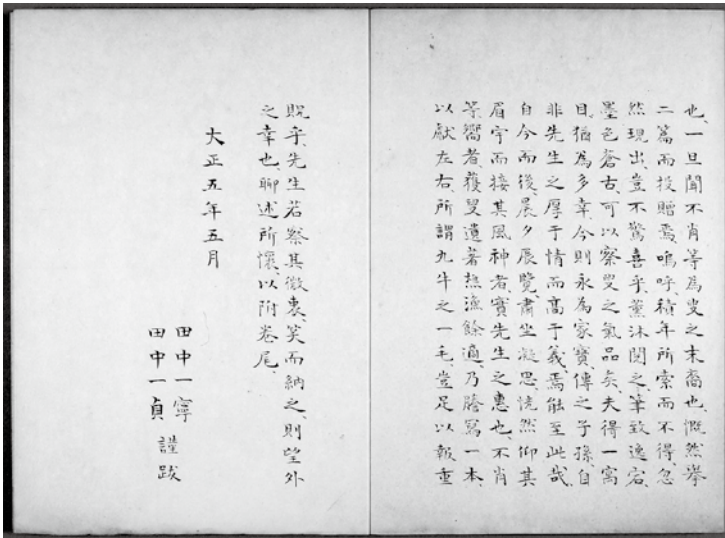
それでは、初代両図書館の館長について、また両図書館の草創期について、展示資料に沿ってみていこう。

先述したように、今回の展示を通じて、これまであまり注目されてこなかった市島謙吉と田中一貞の交流が明らかになった。田中から市島に宛てられた書簡はそれを物語るものである【写真⑪】。蒐集家でもあった市島謙吉は、江戸中期の漢詩人である田中桐江（一六六八―一七四二）の書簡と自筆の書を所蔵していたが、桐江が一貞の祖先であることを知り、それらの資料を贈った。本書簡はその礼状である。書中に、「先日御目二かけ樵漁餘適」云々とあるが、それは桐江の著作『樵漁餘適』のことであり、一貞はこの家蔵本を市島に見せ、後にその影写本を贈った。そしてその贈られた写本が、「市島春城旧蔵書」として当館に収蔵されていたことは驚きであった。

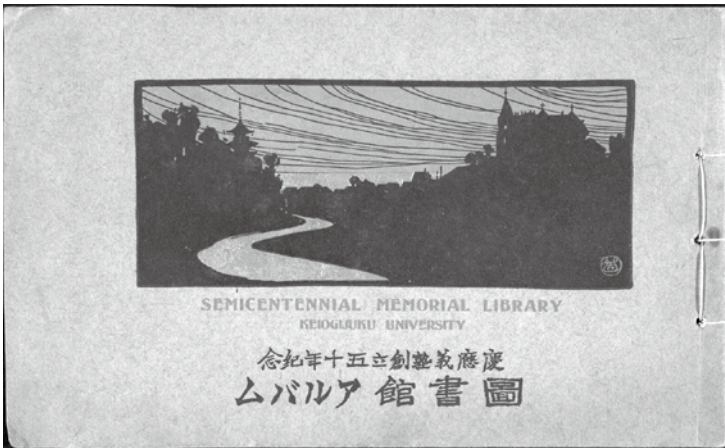
システム共同運用記念シンポジウム「早慶図書館の挑戦」併設展示に寄せて



【写真⑫】『樵漁餘適』跋文（田中桐江著、一九一六年、田中一寧・一貞写、早大蔵）



【写真⑬】図書館アルバム 慶應義塾創立五十周年紀念（慶應義塾図書館「一九二二年」、慶大蔵）



システム共同運用記念シンポジウム「早慶図書館の挑戦」併設展示に寄せて



【写真⑭】慶應義塾図書館アルバムより（慶應義塾図書館、一九三四年頃、慶大蔵）

図書館玄関横の「安礎石」のタイムカプセルの中に現在も眠っているという【写真⑮】。

一方、早稲田については、「東京専門学校壁書写」【写真⑯】に当時の図書室のことを記した落書きがあり興味深い。この資料は、ある校友が一八九〇年に構内の壁に書かれた落書をそのまま写しとり、後にまとめたものである。たわいのない落書きであるが、当時の学生たちの教師観をはじめ、早稲田の雰囲気伝える稀有な資料である。そのなかでも図書室に関する記述は、「夜中何ソ室ヲ開カサルヤ閉室ノ多キヲ云フナリ」などあり、なかなか辛辣である。ちなみに現在の中央図書館は、年間三二〇日以上開館し、授業期間中は九時から二時まで利用できるようになっている。その他、「早稲田大学図書館建築平面図」は旧図書館（現在の二号館）の建築図面であるが、関東大震災の経験を踏まえ堅牢と防火を旨とし、図書数・閲覧者数の急増に対応すべく建設を進める様子が伝わる資料である。図面に見える二階の大閲覧室は三〇〇名を収容する規模であった【写真⑰】。このような、蔵書数の増加や利用者の二

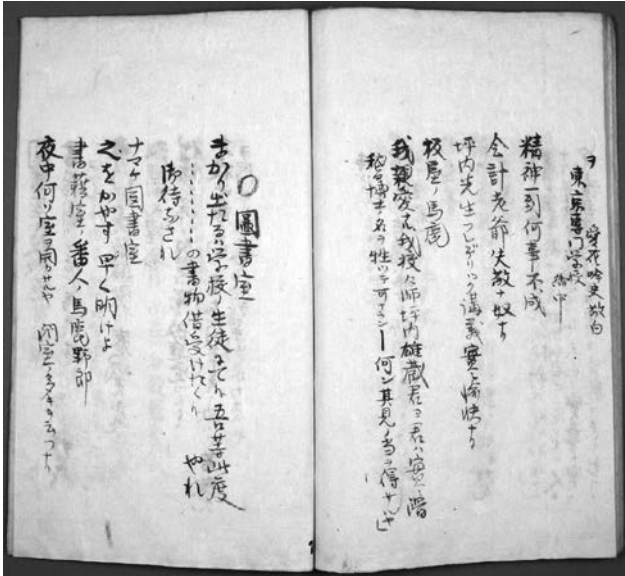
【写真⑮】慶應義塾創立五十年記念図書館開館記念絵葉書

(慶應義塾図書館、一九二二年、慶大蔵)

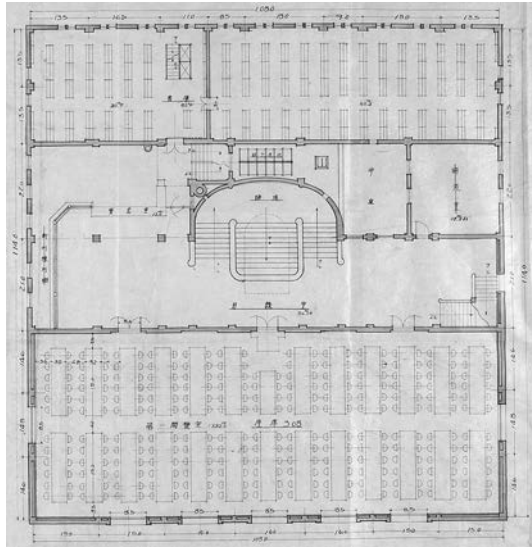


システム共同運用記念シンポジウム「早慶図書館の挑戦」併設展示に寄せて

【写真⑯】東京専門学校壁書写(室井平蔵写、一九一四年、早大蔵)



【写真⑰】 早稲田大学図書館建築平面図（早稲田大学建築事務所、一九二五年、早大蔵）



ズの変化等に対応した図書館の整備拡張は、両校ともに現在においても一番の課題であろう。

おわりに

以上、本展の概要を展示資料の一部とともに振り返った。会期が約一週間とごく短期間であったことは若干心残りではあったが、シンポジウム当日、早慶両校をはじめ各大学・関係機関からの参加者の多くが展示室にも足を運んでくださったことは望外の喜びであった。また、今回は諸々の制約もあり当館の資料が中心とならざるを得なかったが、次は慶應での声も聞かれ、今後のさらなる人的交流も含め、協力関係を作っていければ嬉しい限りである。

※本稿は、本展の「解説目録」をもとに加筆・再構成したものである。